慈覚大師入り纈纈城行く事［宇治拾遺物語巻一三・一〇・第一七〇］

昔、慈覚大師、仏法をならひ伝へんとて、もろこしへ渡り給ひておはしける程に、曾昌（くわいしやう）年中に、唐武宗（ぶそう）、仏法をほろぼして、堂塔をこぼち、僧尼をとらへて失ひ、或は還俗せしめ給ふ乱に合ひ給へり。大師をもとらへむとしけるほどに、逃げて、ある堂のうちへ入り給ひぬ。その使、堂へ入りてさがしける間、大師、すべきかたなくて、仏の中に逃げいりて、不動を念じ給ひける程に、使求めけるに、あたらしき不動尊、仏の御中におはしける。それをあやしがりて、いだきおろしてみるに、大師もとの姿になり給ひぬ。使、おどろきて、御門（みかど）に此の由奏す。御門仰せられけるは、「他国の聖なり。すみやかに追ひ放つべし」と仰せければ放ちつ。

大師、喜びて、他国へ逃げ給ふに、はるかなる山をへだてて、人の家あり。築地（つきぢ）高くつきめぐらして、一つの門あり。そこに、人たてり。悦びをなして、問ひ給ふに、「これは、ひとりの長者の家なり。わ僧は何人ぞ」と問ふ。答へていはく、「日本国より、仏法ならひつたへむとてわれたる僧なり。しかるに、かく浅ましき乱れにあひて、しばらくかくれてあらんと思ふなり」といふに、「これは、おぼろけに人のきたらぬ所也。しばらくここにおはして、世しづまりてのち出でて、仏法も習ひ給へ」といへば、大師喜びをなして、内へいりぬれば、門をさしかためて、おくのかたに入るに、しりにたちて行きて見れば、さまざまの屋どもつくりちづけて、人多くさわがし。かたはらなる所に据ゑつ。

さて仏法ならひつべき所やあると、見ありき給ふに、仏経、僧侶等すべて見えず。うしろの方、山によりて一宅あり。よりて聞けば、人のうめく声あまたす。あやしくて、垣のひまより見給へば、人をしばりて、上よりつりさげて、下につぼどもを据ゑて、血をたらし入る。浅ましくて、故を問へども、いらへもせず。大にあやしくて、又異（こと）所を聞けば、おなじくによふ音す。のぞきて見れば、色あさましう青びれたる者どもの、やせ損じたる、あまた臥せり。一人を招きよせて、「これはいかなることぞ。かやうにたへがたげには、いかであるぞ」と問へば、木のきれをもちて、細きかひなを差しいでて、土に書をみれば、「これは纈纈城（かうけちじやう）なり。これへきたる人には、まづ物いはぬ薬を食はせて、次に肥ゆる薬を食はす、さてその後高き所につりさげて、ところどころをさし切りて、血をあやして、その血にて纈纈をそめて、うり侍るなり。これしらずして、物いはぬ薬、さる物参らせたらば、食ふまねをして捨て給へ。さて人の物申さば、うめきのみうめき給へ。さて後に、いかにもして、逃ぐべきしたくをして、逃げ給へ。門はかたくさして、おぼろげにて逃ぐべきやうなし」と、くはしく教へければ、ありつる居所に帰りゐ給ひぬ。

さる程に、人、食ひ物もちてきたり。教へつるやうに、気色のあるもの、中にあり。食ふやうにして、ふところに入れて、にちにすてつ。人来りて物を問へば、うめきて物ものたまはず。今はしほせたりと思ひて、肥ゆべき薬を、さまざまにして食はすれば、おなじく、食ふまねして食はず。人の立ちさりたるひまに、丑寅（うしとら）の方にぬかひて、「我山の三寶、たすけ給へ」と、手をすりて祈請し給ふに、大なる犬一ぴき出できて、大師御袖をくひて引く。様ありとおぼえて、引くかたに出給ふに、思ひかけぬ水門のあるよりひき出しつ。外に出でぬれば、犬は失せにけり。今はかうとおぼして、足のむきたるかたへ走り給ふ。はるかに山をこえて人里あり。人あひて、「これは、いづかたくょりはおはする人の、かくは走りたまふぞ」と問ひければ、「かかる所へ行きたりつるが、逃げてまかるなり」とのたまふに、「あはれ、浅ましかりける事かな。それは纐纈城なり。かしこへ行きぬる人の帰ることなし。おぼろけの仏の御助ならでは、出づべきやうなし。あはれ、貴くおはしける人かな」とて、おがみてさりぬ。

それよりいよいよ逃げのきて、又都へ入りて、しのびておはするに、曾昌六年に武宗崩じ給ひぬ。翌年大中元年、宣宗位につき給ひて、仏法ほろぼすことやみぬれば、思ひのごとく仏法ならひ給ひて、十年といふに、日本へ帰り給ひて、真言（しんごん）をひろめ給ひけりとなん。